

他の誤りをも誠めんのみ

昔から日本の諺の中にも「忠言耳に逆らう」という言葉があります。

子供の時代もそうですが、ましてや大人になつてから、私共は、友人や知人や、あるいは家族の人達から忠告がましいことを言われたり、あるいは注意をされたりいたしますと、かえつて、そのことが凶星であればあるほど、心に反発するものであります。かえつて自分の身にあたり痛い言葉であればあるほど、逆らいたくもなるものでございます。

しかし、よく考えてみますと、自分に対して忠告をしてくれる、あるいは注意をしてくれる、叱つてくれるということは、非常に有り難いことでございます。

今から何千年の昔、中国の古代の歴史を留められた司馬遷シマケンという方の『史記』「淮南王伝ワナンオウデン」という歴史書がございますが、その中にも「忠言は耳に逆らいて行いに利あり」ということを言われております。

確かに言われた当初は、本当に辛い思いもし、また恥ずかしい思いもするものでございますが、その忠言に従つて自分の行いを反省し、その意味を深く感じ取つていけば、必ず自分にとって大きな利を得る。自分の生き方にとって、その忠言を受け入れて反省することは大きな意味をもつてくることが、経験としてたくさんあるところでございます。

したがつて、私達も遠慮することなく、また友を思い、家族を思えば、また、その人のことを考えれば考えるほど、気が付いた時点において、話をし、説得をし、教導をすることが大切だと思ひます。

昔の中国の『論語』「顔淵」の言葉にも「忠告して善く之を道く」ということを言われております。ですから、ただ悪口を言い、批判をするということと、忠言をもつて善導するということは、本来的に違うのであります。どうか友情を持ち、慈悲の心を持ち、その上で正しく善導して差し上げることが大事だと思ひるのであります。

一般の世法上の道徳や、生き方や、物事に対する対処の問題においても、そうでございますから、ましてや信心の世界において、皆様方が本当に折伏の志をもつて、その人の本当に幸せを考えて教導をされても、なかなか人は聞く耳をもたないというのが現実でございます。

それがまた悪世末法の今日、濁世の衆生の本質であろうかと思つてあります。ならばこそ、大聖人は『立正安国論』の一番最後のところで、

「唯我が信ずるのみに非ず、又他の誤りをも誠めんのみ」(新編御書二五〇ページ)

ということをおっしゃつておられるのであります。短いお言葉でありますけれども、私達の信心の在り方を本当に的確に御教導くださった御言葉だと思つてあります。

確かに私達も御本尊を受けて、一日たりとも勤行に怠りなく、また唱題をもつて、しっかりと家族一同、志を一つにして信心を貫く。誠にそれは立派な姿であります。

しかし、その自行の充実も素晴らしいことでありますが、そこには家族一同が、さらに育ってくる子供さん達に対しても、しっかりと信心を躱けて、今世だけの、今だけの信心ではなくて、過去の罪障を消滅し、そして一家一族の未来永劫にわたつての信心の法灯を絶やすことなく、歪めることなく、常に現当二世、次の世代にしっかりと妙法の功德を残して、信心の火をしっかりと家族一同が継いでいくことも、これまた大切な要素でございます。

それと同時にまた「他の誤りをも誠めんのみ」ということで、やはり折伏の志が・慈悲が・行動が伴った、唱題信心であるべきだと思っております。

たとえ友人が顰蹙し、顔をしかめ、悪口・罵詈・中傷をしてきても、時期を見て、繰り返し繰り返し、善導・教導をしてあげることが、私達は怠ってはならないと思うのであります。その内にその内に、いつかはと思っっているうちに、いつしか時というものはあるという間に過ぎ去って、とうとうその方が亡くなってしまふということもあるわけでございます。

ですから、思い立った時に、気が付いた時に、常に自分が志を立てた時が最高の時と思つて、大聖人の『立正安国論』の御言葉を実践していただきたいと思つます。

『三大秘法抄』にも、

「末法に入つて今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり」(新編御書二五九四ページ)

という御指南がございます。これも『立正安国論』の御指南と全く同意であります。大聖人様のお唱えあそばされた題目、日興上人が実践されたところの信心修行は、正に自行化他に亘りての南無妙法蓮華経の御生涯であつたと拝察し、確信申し上げる次第でございます。

私達も今こそ、どんなことがあつても、また創価学会その他、社会の人が私達に対して、どのような危害や悪口・中傷等々を重ねてまいりましょうとも、大聖人様の弟子信徒として、崇高な信心の大道を貫くことが大切と思つてあります。

皆様方も唱題・信心その決意、一念のあるところ、必ず自分の所願は成就していくことができる。そういう確信を持つて頑張つていただきたいと一言申し述べまして、本日の御挨拶とさせていただきます。